

## 坂東武者の思想と信仰

—『将門記』『源平闘諍録』における兵（つわもの）の世界観—

大山 眞一

日本大学大学院総合社会情報研究科

## The Thoughts and Beliefs of Bando Musha

—A portrait of the way *Tsuwamono* (warrior) viewed the world as chronicled in “*Shomonki*” and “*Genpei Tojoroku*”—

OYAMA Shinichi

Nihon University, Graduate School of Social and Cultural Studies

---

The main aim of this manuscript is to trace the origins of the Middle Ages Bushi, and provide insight into the thoughts and beliefs of the legendary Bando Musha as *Tsuwamono* (warrior).

In particular Taira no Masakado and his family who lived during the mid-Heian era are focused, and consideration is given based on the way in which *Tsuwamono* in “*Shomonki*” and “*Genpei Tojoroku*” viewed the world.

---

### 序

本稿では、中世武士の源流を辿り、兵（つわもの）<sup>1</sup>としての坂東武者の思想や信仰を探るのが主な狙いとなる。具体的には平安時代中期における平将門やその一族に焦点を当てるが、『将門記』や『源平闘諍録』における兵の世界観を考察の拠り所としたい。

『将門記』は平安時代中期の坂東武者である兵の諸相を描き出しているが、『保元物語』『平治物語』と比較すると、生死に対する観念の記述が極めて少なく、また、参考文献等でそれらを検証することも極めて困難である。平将門（？-940）や平貞盛（？-989）の死生観や生死観が確認できない理由の一つとしては『将門記』の性格にあるものと思われる。作者に『将門記』を実録的、且つ叙事詩的に著そうとの趣旨が濃厚であれば、歴史的事実関係の記述に重きを置き、兵の思想や信仰といった個人的な問題には敢えて触れる必要がなかったのかもしれない。『将門記』においては、平将門をはじめ登場人物全ての宗教・信仰に関わる記述は一切認められない。しかしながら、作者の儒教観や仏教観から兵の思想や信仰の推察はある程度許容されよう。

中世において浄土信仰が中世武士の生死観形成に

多大な影響を与えたことは、拙稿<sup>2</sup>で既に検証済みであるが、古代においては、兵である坂東武者への浄土信仰の影響は限りなく少ないと考えて大過ないであろう。『将門記』に見られるように、兵の人倫観の未熟さや一般民衆を巻き込む大量殺戮が当たり前だった時代性も彼らの宗教観や信仰観の構築を阻害していたものと思われる。

とはいえ、頼るべき便が無いわけでもない。『将門記』以外の史料から何らかのヒントを得たい。例えば、後世の『源平闘諍録』には将門と良文の妙見信仰（北極星・北斗七星を信仰する星辰信仰）についての記述が確認できるが、そこには中国古代の天命思想が大いに関わっていると考えられる。そのような宗教的観点から兵の信仰を試論することで、彼らの思想、言い換えるならば中世武士の死生観や生死観の源流ともいうべき観念に迫りたい。また、戦に関わる主従関係の諸相から、兵の世界観についても確認したいと考えている。

平安時代、九世紀から十世紀に存在した兵には、中世の如き封建的主従関係の痕跡が極めて乏しい。当時、源・平・藤等の賜姓貴族が辺境軍事貴族として東国へ下向したが、各地の豪族と姻戚関係を結ん

だ、在地における私営田領主というのが兵の実態であった。特に、東国、常陸国へ下った桓武平氏の系統がその代表格であるが、『将門記』に見られるように、武装化した私営田領主らが国衙側と所領や租税等の問題をめぐって対立し、その一方で一族同士でも私闘に明け暮れていたのである。戦における従類・伴類<sup>3</sup>といった主従関係の記述が『将門記』に散見される。党に所属する従類はともかく、主に私営田の農民でもある伴類には封建的な主従関係は全く認められず、いわば同盟者の様相を呈し、両者の関係は対国衙に関わる利害関係と言い換えることができよう。

当初、常陸・上総・下総へ下向し各地で土着した平一族は、平国香（？-935）を長として良好な一族関係を保っていたと思われるが、一族の姻戚である源護（生没年不詳）と将門の関係悪化により緊張関係が生じ、おそらく領地をめぐる争いから武力に優れた将門との軋轢が増大していったと推測される。

今回は、『将門記』『源平闘諍録』を中心に、兵としての坂東武者の思想と信仰の考察を試みるが、先述したように、『将門記』は将門ら登場人物の思想性に乏しい。したがって、作者の思想から彼らの思想を導き出すことになる。信仰については、幸いなことに『源平闘諍録』にその手がかりを見出すことができる。その他、兵の一族観や主従観という側面から兵の世界観を明らかにすることも、彼らの思想に迫る有効な手段となろう。そのためには、当時中央から坂東へ下った賜姓軍事貴族の血縁関係や姻戚関係の実態を把握し、兵と従類・伴類の主従関係と兵と中央政府の主従関係といった二重構造にも踏み込んで論考したい。そして、無位・無官で私営田領主であった将門や中央政府の官職を得ていた将門の従兄弟貞盛らの主従観を比較対照し、中世武士の思想に繋がる兵の思想の実体について考えてみたい。

## 1. 『将門記』について

まず、史料となる『将門記』について触れておこう。原本は現存しないが、『真福寺本』将門記と『楊守敬旧蔵本』将門記の写本が存在する。双方の写本は冒頭部分が欠失しているが、抄本『将門略記』や『歴代皇紀』『朱雀天皇条』からある程度の推察がで

きる。『将門記』とは通称で正式な名称は不明であるが、岡田希雄は、『将門記』は、『扶桑略記』に「平将門合戦章」、『宝物集』に「平将門合戦状」という記述があることから、それらが正式名称である可能性に触れている<sup>4</sup>。いずれにしても、新たな史料が出てこない限り、現表題の『将門記』が相応しいように思われる。この『将門記』には一族の私闘から国家的な謀反へ展開していく平将門の乱が描かれ、最後に討ち取られた将門が、地獄から伝えたという「冥界消息」も記されている。

『真福寺本』は名古屋市の真福寺に伝わるもので、十一世紀末、承德三年（1099）に書き写した、とされる奥書がある。『楊守敬旧蔵本』は明治時代初期に来日した清国公使・書家の楊守敬（1839-1915）が所持していたとされるもので、両者を比較すると、『楊守敬旧蔵本』には自由奔放、稚拙な筆致が認められ、しかも改変添削された草稿本の趣があるのに対して、『真福寺本』は几帳面な筆致で丁寧な注釈まで加えられ、恰も清書本の趣がある。研究者によっては、後者は前者より数十年古い作と考える者もいる。いずれも巻首部分が欠落しているが、『将門略記』の抄本などから、将門と伯父良兼（？-939）が、女論がもとで、一族間の死闘の火蓋が切られたという説<sup>5</sup>や両者の闘争に平真樹（生没年不詳）が介入してきたという説<sup>6</sup>もある。文体は両本とも、和風の強い変体漢文で記された巻本である。

『将門記』の作者、成立年代は不明である。作者については、平将門の乱の経緯を正確に記述し、仏教にも通じていることから、東国の僧侶や国衙の下級役人であるとする説や、公文書類に基づいた記述があることから、太政大臣藤原忠平側近の貴族ではないかとする説、その他がある。成立年代も、巻末付近に「天慶三年六月中記文」の一文があることから、将門死去の直後に書かれたとする星野恒説が明治時代以来支持されてきた。しかし、坂本太郎は、『将門記』は天慶三年六月という乱後数月の近い時期に書かれたのではなく、中央在住の文人が創作を加えた物語の性格が顕著であると主張している。

『将門記』には、先に述べたように冒頭部分が欠失しているため、平一族の死闘の原因を『真福寺本』や『楊守敬旧蔵本』に求めることはできない。とこ

ろが、『将門略記』では女論を原因としているが、女論とは伯父良兼と甥将門の女をめぐる諍いではなく、将門に嫁した良兼の娘にまつわる諍いと考えられている。福田豊彦は、当時は貴族社会の正式な結婚形態である招婿婚（婿入り婚）が地方に受け入れられていたので、娶嫁婚の形態を選択した将門と良兼の娘をめぐって両者に蟠りが生じたのではないかと推測する<sup>7</sup>。また、『歴代皇紀』には、新治郡大国玉の領主平真樹に将門が唆されて、平国香と源護との合戦に及んだ旨が記されているが、福田は、平真樹の所領が真壁・新治・筑波に跨っていたため、源護との土地争いが直接的な原因であった可能性もある、と指摘している<sup>8</sup>。序において、源・平・藤等の賜姓貴族が東国へ下向し、東国各地の豪族と姻戚関係を結び、土着化した私営田領主が坂東武者の実態であったと述べた。この領地をめぐる争いは、兵や後世の中世武士の存在理由を構成する重要な要素ということができよう。次に、『将門記』の粗筋を①私闘と②謀反の二部構成で示しておきたい。

#### ①私闘の粗筋

陸奥鎮守府將軍平良将（生没年不詳）<sup>9</sup>を父に持つ将門は、桓武天皇五代の末裔であり、三世高望王（生没年不詳）の血筋をひく。出生地は不明であるが、常陸説が有力である。中央で太政大臣藤原忠平（880-949）の家人として仕えた時期もあり、将門は生涯忠平を主と仰ぐ。常陸に帰った将門は、承平五年（935）頃から一族（姻戚関係にある源護も含む）と私闘を繰り返す。事の発端は待ち伏せをしていた源扶（生没年不詳）らとの一戦で、将門が源護の子、扶、隆、繁三兄弟と大伯父の平国香を死に至らしめたことにあった。外戚関係の因縁から源護の女婿良正（生没年不詳）が甥の将門を討つべく戦を仕掛けたが、川曲村の合戦で返り討ちにされ敗走する。窮した良正は兄の下総介良兼に救援を求めた。その後、下野国府の合戦で、僅か百余騎の将門軍が良兼・良正・貞盛の連合軍を敗走させた。しかし、源護が承平五年（935）の合戦に対し訴訟を起こす。将門は中央政府に召喚されるも、忠平の尽力もあってか朱雀天皇

（923-952）元服の大赦で承平七年（937）に常陸に帰ることを許された。一族の私闘もこれで収まるかと思われたが、叔父良兼が将門に再び戦いを仕掛けてきた。この子飼の渡の合戦では将門が敗れるが、勢い余った良兼は官牧である常羽御厨まで焼失させてしまう。続く堀越の渡の合戦でも将門は脚気と思われる病に見舞われる。妻子ともども敗走し葦津江に潜んでいたところ、子どもは殺害され、妻は父である良兼のもとへ連れ戻されてしまう。しかし妻の弟たちの援助で彼女は将門のもとへ帰された。将門は復讐の念に駆られ良兼を弓袋山に追い詰めるが、その間良兼の追捕令が東国諸国に出された。原因は先の合戦で良兼が官牧である常羽御厨まで焼失させたことにあった。追捕令が出されても、良兼は石田で将門の駆使丈部子春丸に将門の石井の館に手引きさせ、夜襲を仕掛けた。しかし、将門に気づかれ良兼勢は逃げ帰ってしまう。私闘の巻き添えを食った将門の従兄弟貞盛は戦に嫌気がさして、承平八年（938）二月末に官に仕えようと東山道を上洛した。将門は貞盛の真意も知らず手勢百余騎で追跡し、信濃国国分寺付近で千曲川の合戦に臨んだ。貞盛は辛くも京に逃げ、将門を中央政府に訴え出るが、同年二月に将門に召喚状が出された。将門がこれを拒否したため、貞盛は召喚の官符を持って再び東国へ下向した。ところが、貞盛が戻ると叔父良兼は既に他界していた。

#### ②謀反の粗筋

叔父良兼の死によって、一族の私闘も収まったかにみえたが、将門の乱も新たな展開を迎える。将門は武蔵国の紛争に介入するようになる。武蔵権守興世王（?-940）・介源経基（生没年不詳）と足立郡司武蔵武芝（生没年不詳）が租税の件をめぐって対立していた。将門の調停によって、和解に落ち着くことになったが、手打ち式に遅れた経基一行を武芝軍が襲うという手違いが起こってしまう。裏切りと誤解した経基は上洛し、将門・興世王・武芝らに謀反の意あり

と訴え出た。驚いた太政大臣忠平は将門に使いを送り真偽の程を確認したが、将門は常陸・下総・下野・武蔵・上野五カ国の上申書を集め無実である旨を返答した。結局、経基の訴えは誣告と判断され、将門は謀反人とならずに済んだが、政府は問武蔵国密告使として源俊を選任している。これに先立ち、政府は上総介の百済王貞連（生没年不詳）を武蔵国守に任命し、武蔵国権介小野諸興（生没年不詳）らを押領司に任命し群盗追捕を命じている。この史実は東国の無政府状態を暗に示唆するものであろう。着任した武蔵国守百済王貞連と権守興世王は姻戚関係にあったが、やがて両者は対立し、興世王は下総の将門を頼ることになった。また、天慶二年（939）、常陸国において、藤原氏の党類、藤原玄明（？-940）も国司藤原惟幾（生没年不詳）と対立し、妻子を連れて将門を頼ってくる。将門が軍勢を引き連れ国府に調停を試みるが不調に終わった。合戦の末、将門が常陸一国を滅ぼす結果となってしまふ。

興世王の進言により、将門は坂東諸国を手中に収める決意をし、同年十二月十一日に下野、十五日には上野の国府を襲撃した。上野において将門は初めて「新皇」と称し、弟や従類たちの除目を勝手に行い、且つ忠平に書状を出して事の顛末を記し了解を求めた。その後、将門は貞盛を滅ぼすため常陸国を掃討する。戦が一段落すると、伴類たちの兵力を国許に返し軍勢が手薄になったところ、天慶三年（940）二月十四日、将門は下野国の押領使藤原秀郷（生没年不詳）と貞盛の連合軍四千の軍勢に攻められ、神鏑（神の放った矢）によって滅ぼされてしまふ。

以上が『将門記』の顛末であるが、①私闘と②謀反の粗筋で記したように、両者の直接的な因果関係は見出し難い。一族間の私闘で、将門の兵の実力と坂東における紛争調停者としての資質を天下に知らしめた結果が、将門をあらぬ方向、国家謀反という想定外の行動に走らせたという歴史の偶然性がここに確認できるのではないだろうか。

## 2. 『将門記』における天命思想

冒頭で述べたように、『将門記』の作者は将門らの思想を明確には示していないが、作者の思想から当時の社会通念と思われる兵の思想を抽出してみたいと思う。

そもそも、天命思想とは紀元前十世紀ごろ中国の殷から周へ王朝が交代する段階で発生したと考えられる思想で、周が殷を滅ぼした正当性を天<sup>10</sup>に求め、天命による大義名分を思想化したものである。この思想は、『日本書紀』継体天皇七年（513）六月条に五経博士段楊爾（生没年不詳）が百済から貢上されたとの記述から、六世紀頃、日本に招来されたと考えられる。しかし、水谷千秋はこれ以前に古代儒教は日本に伝来していたと指摘する<sup>11</sup>。天の権威を借りて王権の正当性を擁護し、その身分秩序を根底から支えた統治理論<sup>12</sup>は律令制と共に古代日本においても踏襲され、天皇家や中央政府を支える根幹思想となった経緯は容易に推測できよう。広義には儒教の一部と捉えられる天命思想は古代日本の律令体制の統治理論として定着していったのである。

日本における古代儒教（天命思想）の受容は平安中期における王朝国家体制下にも大きな影響を与え続けたと考えられる。そのような思想的背景に鑑みるに、『将門記』には仏教思想のみならず儒教思想が随所に見られるが、特筆すべきは天命思想の影響を受けた記述の占める割合の多さである。次にその箇所を『将門記』から検証してみたい。

### ① 将門の駆使子春丸の裏切

第一の箭に上兵多治良利を射取る。其の遺りの者は九牛の一毛に当らず。其の日戮害せられし者は四十余人、猶し遺れる者は天命を存して以て遁げ散りぬ<sup>13</sup>。

### ② 将門貞盛信濃国千阿川の合戦

厥の内に、彼方の上兵他田真樹、矢に中りて死ぬ。此方の上兵文室好立、矢中るも生きたり。貞盛幸いに天命有りて、呂布の鏑を免れて山中に遁れ隠れぬ<sup>14</sup>。

### ③ 貞盛官符を懐き将門追討

貞盛は天の力有りて風の如くに徹り雲の如くに隠れる<sup>15</sup>。

天を仰ぎては世間の安からざることを觀じ、地に伏しては一身の保ち難きことを吟ぶ<sup>16</sup>。

④ 将門、坂東制圧へ

i 天に五衰有り、人に八苦有り。今日苦に遭ふ、大底何為。時改り世変じて、天地道を失ふ<sup>17</sup>。

ii 天下の騒動、世上の彫弊、斯れより過ぎたるは莫し<sup>18</sup>。

⑤ 将門の書状

付して昭穆を案ずるに、将門已に柏原帝王の五代の孫なり。縦ひ永く半国を領せむに、豈運に非ずと謂はむや。昔、兵威を振るひ天下を取る者、皆史書に見る所なり。将門、天の与へたる所は、既に武芸在り<sup>19</sup>。

⑥ 舎弟将平の諫言と将門の叛乱

i 昔より今に至るまで、天を經とし地を緯とするの君、業を纂ぎ基を承の王、此れ尤も蒼天の与ふる所なり<sup>20</sup>。

ii 争ふ臣有るときは則ち君不義に落ちず。若し此の事を遂げられずば、国家の危ぶみ有らむ。所謂天に違へるときは則ち殃在らむ。王に背くときは、則ち推悉の天裁を賜へ<sup>21</sup>。

⑦ 押領使藤原秀郷、登場

私の賊は則ち雲の上の電の如し。公の従は則ち厠の底の虫の如し。然れども私の方には法なし。公の方には天有り。三千の兵類は、慎みて面を帰すこと勿れ<sup>22</sup>。

⑧ 貞盛、将門の舎宅を焼く

方に今、凶賊を殺害して、其の乱を鎮むに非ずんば、私より公に及びて、恐らくは鴻徳を損なはむか。尚書に云はく、天下安しと雖も、戦はざるべからず。甲兵強しと雖も、習はざるべからずと<sup>23</sup>。

以上が、『将門記』において作者が天命思想の影響を受けたと思われる記述であるが、これだけでは、坂東武者である兵が天命思想を持っていたかどうかを判断するには確かに材料不足である。唯、平将門

の乱後間もなく『将門記』が執筆されていることから、当時の社会通念として、兵である将門らも同様の思想を支持していた可能性もまた否定できないであろう。

天命思想は『将門記』の時系列で①～⑧というように作品全般に貫かれた思想といえる。しかし、仏教思想やその他の儒教思想も随所に確認できることから、『将門記』が天命思想だけに支えられた作品でないことはいうまでもない。①と②の天命は天から与えられた命、つまり寿命を意味しよう。③～⑤については天命思想から派生した天の思想である。しかしながら、作者には、将門の国家に対する謀反を否定する意味においても、天皇制を正当化する天命思想を『将門記』の随所に鏤める意図があったようにも推測できる。⑥～⑧にはその意図が顕著であるように思われる。これは、作者の意図というよりは、謀反を撲滅させるための国家的要請がその背景に潜んでいたようにも考えられる。作者には『将門記』においては将門の英雄としての武勇を賛嘆しつつも、「将門は常に大康の業を好みて、終に宣王の道に迷ふ。仍って不善を一心に作して天位を九重に競ふ。過分の辜、則ち生前の名を失ひ、放逸の報い、則ち死後の媿を示す」<sup>24</sup>と云って将門の謀反行為を否定している。その他、夏王大康の放逸な所業を好んで、周王宣王の道を見失った、という作者の記述から周の天命思想の影響が考えられる。また、作者は、将門が不善を思い、天皇と帝位を争った、とまで主張して将門の謀反の正当性を認めていないのである。まさに天命思想の表れと考えられよう。

一方で、『将門記』の作者は、父国香を将門に討たれたにも拘わらず、「凡そ将門は本意の敵に非ず、(中略)苟くも貞盛は守器の職にあり。須く官都に帰りて、官勇を増すべし」<sup>25</sup>と貞盛に発言せしめ、官職に忠実な原初的な中央軍事貴族の兵像を浮き彫りにした。また将門との信濃国の千曲川で合戦の折にも「如かじ、花門に出でて以て遂に花城に上り、以て身を達せむには」<sup>26</sup>と貞盛に発言させ、中央依存の立身出世主義の片鱗を描写している。以上のことから、天皇制を拠り所とした中央集権国家に対する作者の志向性もうかがえる。

当然のことながら、『将門記』は将門を主人公にし

た物語である。しかし、作者は並外れた武勇や坂東における兵の独立国家の構想に触れて将門を賞賛してはいるが、方や将門を滅ぼした貞盛の中央政府に依存する兵像を描き出すことにも力を惜しんでいない。皮肉なことに、将門を平らげた貞盛は後に中世武士を代表する平家の祖となり、その貞盛流は伊勢平氏の清盛まで連綿と続いていく。とはいえ、『将門記』の作者はそこまで見越して筆を進めたわけではあるまいが、将門の革命的な武勇よりは中央軍事貴族という傭兵としての貞盛の先見性を評価していたようにも考えられる。そこに見え隠れする作者の思想は、天命思想に支えられたものといえよう。

先述したように、「天位を九重に競ふ」という思い上がりや、「新皇の敗徳の悲しび、滅身の歎き」<sup>27</sup>という結果を将門にもたらしたという記述は、まさに天をも恐れぬ将門の悪行を認めぬ『将門記』作者の天命思想の表意といえることができよう。天皇制を中心とした中央政府寄りの姿勢を見せる貞盛と坂東武者として独立国家を目指した将門を対比することで、『将門記』の作者には天命思想を正当化しようとする意図があったようにも思われる。

### 3. 将門と妙見信仰

ところで、天命思想は人間に災いをもたらす自然現象に対する畏敬の念に端を発するものであろう。中国漢代に天命思想から発展した祥瑞災異思想<sup>28</sup>などはその最たるものであるが、この自然崇拜ともいえるべき思想が将門らの氏神的な日本の信仰に反映されてはいないだろうか。

天といえば、夜空に瞬く星々が連想されよう。その星座に関わる妙見信仰の検証をしたい。この信仰の思想的背景には前項でとりあげた天命思想の影響があるように思われる。天命思想の延長線上に妙見信仰を捉えるならば、それは天から連想される宇宙観、自然観といった思想に基づく信仰といえることができるであろう。『将門記』においても天を仰ぐという記述もあり、夜空を仰げば、今も昔も北極星や北斗七星が燦然と光り輝いている。

ところで、『将門記』から兵の信仰を探ることができない限り、他の史料からその手がかりを得なければならない。序で触れた『源平闘諍録』には、将門

と良文の妙見信仰（北極星・北斗七星を信仰する星辰信仰）についての記述がある。

『源平闘諍録』は『平家物語』の異本と考えられており、巻一上下、巻五、巻八上下が現存している。成立年や作者等の詳細は不明であるが、奥書の記述から十四世紀頃までにまとめられたと推定される。将門ら坂東武者、特に千葉氏、梶原氏、熊谷氏についての記述が中心となっている。妙見信仰については、巻五に詳しいため、具体的に検証したい。まず、巻一においては将門の叔父良文に端を発する平氏（良文流）の系譜が詳細に述べられている。以下にそれを記しておく。

彼の高望に十二人の子有り。嫡男国香常陸大掾、将門が為に誅せらる。次男良望鎮守府の將軍、是れ将門が父なり。(中略) 第十二の末子良文村岡の五郎、①将門が為には伯父為りといへども、養子となり、其の芸威を伝ふ。②将門は八箇国を随へ、弥凶悪の心を構へ、神慮にも憚らず、帝威にも恐れず、擅に仏物を侵し、飽くまで王財を奪ひしが故に、妙見大菩薩、将門が家を出でて、良文が許へ渡りたまふ。是に因つて良文、鎌倉の村岡に居住す。五箇国を領じて、子孫繁昌す<sup>29</sup>。(①、②の下線は引用者)

平良文は『将門記』には一切登場しないので、将門側に就いたのか、敵方に就いたのかは、定かではない。しかし、『源平闘諍録』では、下線①にあるように叔父である良文が甥将門の養子になるという興味深い記述がある。真偽の程は別にして、後世に将門が英雄視されると、良文流千葉氏が養子縁組までして良文流が将門の血筋に繋がる正当性を示したとも考えられる。

さて、妙見信仰については、下線②には将門が凶悪の心で、神や天皇にも憚ることなく、寺社や国衙の財宝まで奪ったため、妙見菩薩が将門を見限って良文の家へ渡ってしまった、と記されている。妙見菩薩が家から家へ渡っていくには、信仰心のある家へ移っていくと考えられるので、将門や良文だけが妙見菩薩を信仰していただけでなく、平一族の中でもその信仰者は多かったのではなかろうか。

妙見信仰は北極星・北斗七星信仰と言い換えることができる。古代中国では北極星を天帝と見做す思想（天命思想に繋がる思想か）が生まれたわけであるが、日本に招来された星辰信仰は仏教や氏神と融合し、妙見菩薩として千葉氏などの信仰を集めたものと思われる。妙見信仰は牧畜や船舶航行との関連のある信仰であるが、将門らが牧の経営にもあたっていた事実から、妙見菩薩を信仰対象としたと考えても無理はないであろう。

次に、『源平闘諍録』に妙見菩薩と将門の関係について興味深い箇所があるので、それに触れてみたい。源平騒乱の折、源頼朝（1147－1199）が千葉常胤（1118－1201）に千葉氏が妙見菩薩を信仰する理由を聞いたところ、常胤は、妙見信仰は将門の時代に遡ると答え、承平五年（935）—承平七年（937）の誤りか一、叔父良兼と甥将門の合戦の折、将門が蚕飼河に追い詰められ時、急に一人の小童が出てきて、将門軍を救った伝説を頼朝に話した。そして、将門が妙見菩薩と結縁をもったが、将門が悪行を重ねたので妙見菩薩が良文の家に移っていった経緯についても語った。それでは、その箇所を以下に記してみよう。

将門遂に勝を得て、童の前に突い跪き、袖を掻き合せて申しけるは、『抑君は何なる人にて御座すぞや』と問ひ奉るに、彼の童答へて云はく、『吾は是れ妙見大菩薩なり。昔より今に至るまで、心武く慈悲深重にして正直なる者を守らんと云ふ誓ひ有り。汝は正しく直く武く剛なるが故に、吾汝を護らんが為に来臨する所なり。自らは則ち上野の花園と云ふ寺に在り。汝若し志有らば、速かに我を迎へ取るべし。吾は是れ十一面観音の垂迹にして、五星の中には北辰三光天子の後身なり。汝東北の角に向かひて、吾が名号を唱ふべし。自今以後、将門の笠駈には千九曜の旗<sup>30</sup>を差すべし』と云ひながら、何ちとも無く失せにけり。仍て将門使者を花園へ遣はして之を迎へ奉り、信心を致し、崇敬し奉る。将門妙見の御利生を蒙り、五ヶ年の内に東八ヶ国を打ち随へ、下総国相馬郡に京を立て、将門の親王と号さる。然

りながらも、正直諂佞と還つて、万事の政務を曲て行ひ、神慮をも恐れず、朝威にも憚らず、神仏の田地を奪ひ取りぬ。故に妙見大菩薩、将門の家を出でて、村岡の五郎良文の許へ渡りたまひぬ<sup>31</sup>。（下線は引用者）

『源平闘諍録』には年号等、その他史実と異なる記述が多く、将門から千葉家の正統性を強調する余り、かなりの捏造部分が散見される。したがって、その信憑性は希薄であるが、所々参考とすべき箇所も見られる。下線部分では、十一面観音が妙見菩薩に垂迹したという神仏習合の背景には、奈良時代から伝わる東大寺二月堂の十一面悔過法要<sup>32</sup>と民間信仰の妙見菩薩と結びついたものと考えられるが、古代日本の融通無碍な発想には驚かされるものがある。また、五星については、古代中国では北極星近辺の星々を紫微垣といて、その中で最も重要な五つの星が北極五星（天枢・后・庶子・帝・太子）と名づけられ、天枢は北極、北辰とも呼ばれている。これらの名称からも天命思想の影響が想起されるであろう。北辰三光天子とは日天子・月天子・明星天子の三光天子を指す。文中には妙見菩薩をこの三光天子の後身であるとの記述がある。また、文中に北斗七星についての記述はないが、妙見菩薩と関係が深いので、参考までに北斗七星について触れておく。北斗七星は北極星を規則正しく巡り、常に北極を指す星座である。北斗七星は、それぞれ貪狼星・巨門星・禄存星・文曲星・廉貞星・武曲星・破軍星と名づけられている。この北斗七星の中でも、破軍星はこの星の方向に向かって戦いを挑めば必ず負け、この星を背にして戦えば必ず勝つと信仰がある。そして、北斗七星中の第七星・破軍星は弓箭の神として崇拝されたことから、中世には武士の守護神として敬われ、千葉氏など地方の豪族たちの信仰を集めた。

先に『将門記』作者と天命思想の関わりについて述べたが、妙見信仰（北極星・北斗七星を信仰する星辰信仰）の考察から、将門ら平一族が天命思想の影響を受けた思想を持っていたと推測できよう。また、北斗七星の破戦星信仰は戦に関わる思想として坂東武者に支持されていたと思われる。

#### 4. 『将門記』に見られる兵の世界観

次に、坂東武者の世界観から兵の思想について考えてみよう。拙稿『中世武士の生死観(5)』<sup>33</sup>において、保元・平治の乱を、武家の地位を確立する以前の武士が同族の命を奪ってまでも武門の存続を余儀なくされた血族排斥の矛盾や、個の命と引き換えに家の存続を余儀なくされた自己犠牲の矛盾を乗り越えるべき段階と捉えた。『保元物語』や『平治物語』においても同属同士の殺害行為は認められるが、それは、少なくとも公に対する大義名分のもとに行われた行為であり、中世武士が武家を確立するための超えなければならない矛盾であった。しかし、『将門記』における将門ら坂東武者の兵にはそれらの矛盾を矛盾として自覚し、その矛盾を正当化、且つ合理化するイデオロギーの確立を求める段階にはなかったと考えられる。

『保元物語』や『平治物語』の中世武士の場合は、一族間というよりも親子・兄弟間の殺害が際立っている。しかし、『将門記』の場合は、伯父(叔父)・甥の一族間の死闘の記述だけに留まり、父子・兄弟間の殺害の記述は皆無である。穿った見方をすれば、賜姓軍事貴族が兵から武士に変容する過程で、一族間の死闘が近親間の殺し合いになるまで、彼らの人倫観が屈折していったという見方もできる。

では、身内同士の殺害に対して彼らの心性の有様はどうだろうか。『保元物語』では、源義朝が父為義と乙若以下四兄弟を殺害し、『平治物語』では、同じく義朝が娘を殺害するが、罪業観・罪障観に苛まれた中世武士の実態を知ることができる。一方、『将門記』においては、作者は兵の心性までには深く立ち入っていない。したがって、将門らが罪業観・罪障観に近い感情を抱いていたかどうかをうかがい知ることができない。そこで、心性面からの考察が困難であれば、私闘をめぐる坂東武者の一族観の考察から彼らの世界観を浮き彫りにしてみよう。

『将門記』における私闘の諸相は、東国へ下向した賜姓貴族が在地化・私営田領主化し、牧や私営田の経営に伴い、武力を蓄積していった経緯を如実に物語っている。賜姓貴族は在地豪族と血脈を通じ坂東武者と化した。彼らは私営田の保全と拡大を推進する中で、一族と刃を交える機会もしばしばであ

った。血族や姻族の複雑なしがらみが一族間の私闘を更に助長させたと思われる。将門もその平一族の私闘から国家的謀叛の張本人に祀り上げられてしまった経緯があるので、先ずこの問題から考えてみたい。

『将門記』冒頭に「扶等、陣を張りて相待つ」<sup>34</sup>と記されているが、源扶は源護の子である。戦いの原因ははっきりしないが、源護は嵯峨源氏の出で常陸国筑波山西麓に広大な私営田を所有していた。境界を接する平真樹と争いが絶えず、仲介に入った将門と合戦に及んだというのが真相であろう。その後、将門に息子三人を殺害された源護が、女婿である良正のみならず良兼らも味方に引き入れたことにより、この小競り合いは平一族を巻き込む私闘となっていた。結果的に将門は一族全てを敵に回して孤軍奮闘することになるのである。

平一族の最初の戦いで源護の子扶・隆・繁ら三兄弟と平国香が将門に討ち取られると、源護の女婿であり、将門の叔父でもある平良正が源護らの復讐のため将門と川曲村の合戦に及んだ。『将門記』の作者は、「爰に良正偏に外縁の愁ひに就きて、卒に肉親の道を忘れぬ」<sup>35</sup>と肉親の道から外れた良正を非難している。良正の行為自体には道徳的に批判されるべき兵の社会通念があったようだ。

しかし、良正が兄良兼に救援の手紙を認めると、良兼は「其の由、何とならば、因縁の護の掾、頃年、悔れ愁ふる所有り。苟くも良兼は彼の姻姫の長為り」<sup>36</sup>と返答した。このことから、良正や良兼が甥将門との血縁関係よりも新たな姻戚関係を重んじる兵の一族観が垣間見られる。良兼が姻戚関係を重んじる背景には、良兼流の兵の家を継続させていくことが最優先となっていたように思われる。このような状況において、将門の乱も姻戚関係の纏れた領地争いから一族の骨肉の争いに転じたとの推測もできよう。

当時の兵の一族観について考えてみると、平一族である伯父国香・良兼や叔父良正が姻戚である源護を擁護し、将門を敵と見做した事実が興味深い。その事実を裏づける箇所が『将門記』にある。「云所、夫婦は親しくして瓦に等し。親戚は疎くして葦に喩ふ。若し遂に殺害を致さば、若しは物の譏り遠近に在らむか」<sup>37</sup>という記述から、葦の屋根のような親

戚より瓦屋根のように密な夫婦間を重んじる思想が当時の兵の社会通念として支持されていた事実がうかがえる。新たな兵の家を築きあげる姻戚関係を重視する考え方が一般的だったのかもしれない。姻戚関係に成り立つ兵の家は一族の伯父(叔父)・甥という親戚関係より優先されるのは当然であろう。それどころか、一族の甥は伯父(叔父)の家を脅かす敵として見做されたに違いない。

ところが、将門にとって従兄弟である貞盛との関係は少々複雑である。貞盛は当初、父である国香が将門に殺害されても、貞盛は衝突を避けるどころか将門とよしみを通じようとさえした。次に、叔父・甥の関係と従兄弟同士の関係の違いがうかがえる興味深い事例を『将門記』から引いてみよう。

貞盛情案内を検するに、①凡そ将門は本意の敵に非ず、斯れ源氏の縁坐なり。諺に曰く、賤しき者は貴きに随ひ、弱き者は強きに資る、如かじ、敬順せむにはと。

苟くも貞盛は守器の職に在り。須く官都に帰りて、官勇を増すべし。而して孀母堂に在り、子に非ずば誰か養はむ。田地数有り、我に非ずば誰か領せむ。②将門に睦びて芳操を花夷に通じ、比翼を国家に流へむと。仍て具に此の由を挙げ、慙にせむこと斯れ可ならむ、てへり<sup>38</sup>。(①、②の下線は引用者)

貞盛の場合は、当時の兵像としては異例といえよう。父が殺害されれば、理由のいかんを問わずあだ討ちに及ぶのが兵の家の長子としての務めであろう。しかし、下線①の貞盛の発言は、姻戚である源護の側に私闘の原因があって、将門は逆に戦いを仕掛けられた側であると暗に示唆しているように思われる。『将門記』の作者は「長いものには巻かれよ」的な諺を引用し、貞盛をまるで腰抜けのように描写しているが、実のところは、事の真相を見極める伶俐さが貞盛にはあったのかもしれない。下線②にあるように、貞盛には中央政府と東国を結び付けるパイプ役として将門が是非必要であり、将門との和睦を合理的な解決方法と考えていた節もあり、兵のあるべき将来像まで描いていたかもしれない。言外の意味

だけで貞盛を判断する危うさがこの件には潜んでいるように思われる。将門の周辺には戦いを避ける坂東武者も存在したのである。

梶原正昭は、外縁的關係(因縁)を重視した良正と、因縁よりも血縁関係を重んじた貞盛を比較して、この因縁をめぐる二つの立場の対立こそ私闘の本質をなすもので、族的結合を地縁的な方向へと再編成しようとする、在地武士団の過渡的な苦悩や動揺を示したものとさえそうに思う、と指摘している<sup>39</sup>。このことから、族的結合から地縁的結合を目指す叔父良正・良兼と血縁関係を重んじる従兄弟同士の将門・貞盛との一族観の違いが浮き彫りになったように思う。しかし、貞盛の思惑も叔父良兼によって脆くも打ち砕かれてしまう。良兼が良正の依頼を受けて将門と干戈を交えようとした折に、貞盛の不甲斐無さに驚き、道理を論じ貞盛を参戦させようと試みる。その件をあげてみたい。

介相語りて云はく、「聞くが如くば、我が寄人は将門等と慙懃なり、てへり。斯れ其の兵に非ざる者なり。兵は名を以て尤もと為す。何ぞ若干の財物を虜領せしめ、若干の親類を殺害せしめて、其の敵に媚ぶけきや。今須く与に合力せらるべし。将に是非を定めむとす」と云ふ<sup>40</sup>。(下線は引用者)

良兼は、父国香や親類を将門に殺害され、復讐もせず、逆に将門に媚びようとする貞盛に対し、下線部のように、「兵は名誉を第一とすべきだ」と論じた。この良兼の発言には、中世武士の「命な惜しみそ、名を惜しめ」に通じるものがあり、武家の存在理由の一つと考えられる名誉の概念を示唆する祖形と見做すことができよう。その他、「兵の名を畿内に振り、面目を京中に施す」<sup>41</sup>、「所謂敵は猛き名を奪ひて早く去り、(中略)将門は偏に兵の名を揚げむと欲ひ、亦合戦を一兩日の間に変じて、構ふる所の鉾楯三百七十枚、兵士は一倍せり」<sup>42</sup>、「名を損じ利を失ふは、邪悪より甚だしきはなし。(中略)『前生の貧報を憂へず、但し悪名の後に流はることを吟ぶ』てへり」<sup>43</sup>、「虎は以て皮を遺し、人は以て名を遺すと」<sup>44</sup>、「過分の辜、則ち生前の名を失ひ、放逸の報い、則ち死

後の媿を示す」<sup>45</sup>等の表現が『将門記』の中にあり、名を後世に遺す兵の系譜が中世以降の武士に繋がっていると考えられよう。

以上の考察から、東国へ下った賜姓貴族が、兵である坂東武者と化し、在地化を磐石なものにすべく在地の豪族や土豪と血縁関係を結んだ必然性が理解できたものと思う。彼らは、私営田の保全と拡大に力を入れる余り、伯父（叔父）・甥の親族関係よりも姻族との関係を重視し、一族の争いを余儀なくされた。その背景には武士の家に通じる兵の家の存続があったのである。そして、未だ武士団を形成し武家の成立を見ない古代にあっては、兵の世界観と中世武士のそれとは異なる一面があるが、一方で「名を遺す」という名誉に対する兵の観念が中世武士の思想に通じることも検証できたように思われる。これら坂東武者の世界観はまさに中世武士の源流といえよう。

## 5. 将門と貞盛の主従観

最後に、将門と貞盛の相反する主従観の比較から坂東武者の世界観を確認したい。後世の中世武士は、承平・天慶の乱、前九年・後三年の役を経て、保元・平治の乱を契機として、武家の棟梁を中心に封建的主従関係を結ぶようになった。しかしながら、坂東武者、将門の時代には武家の棟梁という概念はなかった。兵の組織も兵農分離の段階になく、従類・伴類といった従の二重構造によって支えられていたのである。また、将門が摂関家の家人として仕えていた事実も忘れてはならない。もう一つの主従関係である。注4において、従類、伴類について触れた。関幸彦は従類を後世の武士団内部における家子・郎党的要素が含まれる、と指摘しているが<sup>46</sup>、その系譜が中世武士の主従関係に繋がっていくものと思われる。この時代に武士団の形成は確認できないが、将門ら平一族はこの従類に支えられて、戦や私営田経営等に携わっていたと考えられる。中世のように主君に対する服従という概念が従類にあったかどうかは定かでないが、吉田晶は、伴類は味方の敗北があきらかになるとしばしば逃亡するが、従類は最後までたたかったらしく逃亡の記述は全然ない、と述べている<sup>47</sup>。一方の伴類は従類のような忠誠心に欠

け、吉田の指摘にあるように、戦況によっては逃亡、離脱を憚らぬ歩兵集団で、普段は領主の私営田で耕作に従事していた農民であったと考えられている。『将門記』においては数百・数千にも及ぶ歩兵の伴類と、数十騎程度の従類という陣容が描写されているため、伴類は質より量の集団であったという捉え方ができる。このように、兵の主従関係は従類と伴類に支えられてはいたが、少数の従類との原初的な封建的主従関係と多数の伴類との離合集散型の非封建的主従関係がその実態であったようだ。少数精鋭である従類と雑兵兼農民の伴類から構成された兵の軍団は平一族や源一族に共通したものであったろう。

次に、将門と貞盛の相反する主従観について考えてみたい。前述のように、坂東武者である兵と従類・伴類が基本的な主従関係を構成しているが、将門はそれ以外にもう一つの主従関係を築いていた。それは太政大臣藤原忠平(880-949)との関係であった。将門は若年の頃、中央で忠平の家人として仕え、藤原秀郷、平貞盛に滅ぼされるまで忠平と交渉をもったようである。『将門記』には、将門が上野で新皇宣言をした天慶二年(939)に私君忠平に上申書を送って、将門が桓武天皇五代の孫であることを強調し、日本国の半分を専有したとしてもその正統性があると述べている。そして、忠平に対し「抑、将門は、少年の日に名簿を太政大殿に奉りて数十年、今に至り、相国、摂政の世に、意はざるに此の事を挙ぐ。歎念の至り、勝げて言ふべからず。将門は国を傾くるの謀を萌せりと雖も、何ぞ旧主の貴閣を忘れむ」<sup>48</sup>とまで告白している。国家に対する謀反を自ら認めながら、その国家の中枢にある太政大臣忠平に対し忠誠を誓っている将門の主従観は理解に苦しむ。しかし、かつて源護の愁訴により将門が召喚された折にも、朱雀天皇の元服を理由に将門は恩赦されている。これも忠平の威光によるものと推測できる。たとい将門の国家観に誤りがあったとしても、坂東武者が太政大臣忠平を通して中央政府と繋がりを持つとした事実は明白である。

一方、結果的に将門を打ち滅ぼした貞盛の場合、中央政府に対する依存度は極めて高かった。『今昔物語集』巻第二十五「平将門、発謀反被誅語第一」<sup>49</sup>に貞盛の官職が左馬充であったと記されている。太政

大臣忠平の家人として仕えていた無位・無官の将門の立場と、中央政府の構成員となっていた貞盛の立場の相違は明らかであった。将門や貞盛は父親が東国で健在な間は、中央に上り、有力貴族の家人として仕え、あるいは中央政府の官職に就くことで、中央政府と東国とのパイプを築きあげる狙いがあったのであろう。しかし、『将門記』によれば、一族の長である国香が将門に殺害されても、その長子貞盛は将門との衝突を避けるどころか、将門とよしみを通じようとさえする。中央政府における官職を求める意向が貞盛には殊のほか強かったようである。結局、貞盛は伯父良兼に諭され、将門を追討することになるのだが、一族よりも中央政府に傾斜する貞盛の主従観には、兵というよりは後世の中世武士としての性格がうかがえ、興味深いものがある。

しかしながら、将門と貞盛の主従観には大きな違いがある。将門の場合は、中央政府のパイプ役として太政大臣藤原忠平と関係を持ちつつ、最終的には、私営田領主として東国の独立を目指し、国家的謀反を働く兵となった。一方、貞盛の場合は、私営田経営よりも中央政府における栄達を望み、官僚組織における中央軍事貴族を志向し原初的な武士の道を進んだのである。『将門記』の兵の世界観には、「私」を志向する兵から、「公」を志向する兵(武士)への、転換期ともいべき実態が如実に表れているものと思われる。

## 結語

国家を揺るがす平将門の乱の勃発は平一族の私闘に端を発する。『将門記』の主人公である将門は新皇と称して東国の独立化を図ったが、その段階でも将門は中央政府側の太政大臣藤原忠平との主従関係は解消していない。そもそも、平将門の乱は王家(中央政府)に取って代わる本来の謀反ではなく、現体制を容認しつつ東国における擬似国家を目指したのがその真相といえよう。それは、単なる一族の私闘から偶発的に謀反に発展してしまった渦中の将門に、元々新国家に対するイデオロギー的発想は認められないからである。しかし、私闘から国家的謀反への転換は、見方を変えれば兵から武士への転換を意味する。将門を滅ぼした藤原秀郷や平貞盛らは、国司

や鎮守府將軍などを歴任し中央軍事貴族の地位を獲得した。その後、彼らの子孫は私営田領主から在地領主へとその確固たる身分を定着させて、中世武士への足懸かりを築いたのである。

本稿では、『将門記』においては天命思想に、また『源平闘諍録』においては妙見信仰に、それぞれ兵の思想や信仰の拠り所を求めその実態を明らかにした。『将門記』には仏教思想や儒教思想が随所に見られるが、特筆すべきは天命思想の影響を受けた箇所への占める割合の多いことである。具体的に、八例を挙げて検証を試みたが、『将門記』の作者には、将門の国家に対する謀反を否定する意味においても、天皇制を正当化する天命思想を作品の随所に鏤める意図があったと思われる点にも触れた。これは、作者の意図というよりは、謀反を撲滅させるための国家的要請がその背景に潜んでいたようにも思われる。『将門記』が乱後間もなく著されたことを考えると、作者の天命思想が当時の社会通念として兵にも受容されていた思想であると推測して大過ないであろう。

次に、天命思想が反映されたと思われる妙見信仰について考察したが、『源平闘諍録』には将門と良文の妙見信仰(北極星・北斗七星を信仰する星辰信仰)についての記述があり、天命思想の影響を受けたと考えられる思想や北斗七星の破戦星信仰等が将門ら平一族に支持されていた点についても試論した。

続いて『将門記』における坂東武者の一族をめぐる世界観を取り上げ、『保元物語』『平治物語』における中世武士の親族をめぐる世界観との比較をした。両者を比較することで、兵から武士への過渡期における坂東武者の一族観の実態を捉え、中世武士との相違点や共通点を明らかにできたものと考えられる。

最後に将門と貞盛の主従観の考察では、両者の主従観には大きな違いがあった点も確認できた。将門の場合は、中央政府側の太政大臣藤原忠平と関係を持ちつつ、私営田領主兼兵として最終的には東国の独立を目指して国家的謀反を働いたが、一方、貞盛の場合は、私営田経営よりも中央政府における栄達を望み、官僚組織における中央軍事貴族を志向することで原初的な中世武士の道を進んだ。両者における主従観については、「私」を志向する兵と「公」を志向する兵という差別化ができよう。そして、この

両者には、古代から中世の過渡期における、古代の兵から中世武士への転換点ともいえるべき実態が如実に表れているものと思われる。結果的に将門を滅ぼした平貞盛や藤原秀郷、そして源経基らの系譜が官僚組織において官位を与えられ在地領主化した中世武士の祖となっていくのである。

以上、『将門記』『源平闘諍録』における兵の思想や信仰を、彼らの世界観、つまり宗教観、一族、親族間における複雑な関係、そして将門、貞盛の相反する主従観から考察したが、中世に武士団を結成する以前の兵の実像に少しでも近づくことができたものと思う。

- 1 兵（つわもの）の定義については、日本大学大学院総合社会情報研究科紀要、2007年、8号『中世武士の生死観（1）』参照。本稿では坂東武者の将門らが武門や武士団を形成していないため兵（つわもの）と表記する。
- 2 日本大学大学院総合社会情報研究科紀要、2009年、9号『中世武士の生死観（2）』『中世武士の生死観（3）』、同紀要、2010年、10号『中世武士の生死観（6）』参照
- 3 岩井市史編さん委員会『平将門資料集』新人物往来社、1996年、73頁。『将門記』では領主と密接な関係のある「従類（与力）」に対し、自立性の強い公民的な一般民衆が伴類と呼ばれている。豪族、土豪、農民等の雑多な階層で構成された同盟者である。
- 4 林睦朗『論集 平将門研究』現代思潮社、1975年、1-12頁。
- 5 蓬左文庫本『将門略記』の中に「いささか女論によりて、舅婿の中すでに相違せり」とある。
- 6 『歴代皇紀』「朱雀天皇条」将門合戦状の中に「平真樹に語らわれ、承平五年（935）二月、平国香ならびに源護と合戦す」とある。
- 7 福田豊彦『東国の兵乱とものふたち』吉川弘文館、1995年、7頁。
- 8 前掲『平将門資料集』、72頁。
- 9 平高望の三男。『扶桑略記』や『今昔物語集』で良持と表記されているが、詳細は不明。
- 10 水谷千秋『日本史研究』日本史研究会、2006年、24頁。天使（皇帝）が天下を統治する根拠を天命すなわち天（天帝・皇天）に求める思想。
- 11 同書、24頁。
- 12 佐藤貢悦『古代中国天命思想の展開』学文社、1996年、112頁。
- 13 柳瀬喜代志、他 校注・訳『将門記・陸奥話記・保元物語・平治物語』小学館、2002年、43頁。

- 14 同書、46頁。
- 15 同書、48頁。
- 16 同書、48頁。
- 17 同書、60頁。
- 18 同書、61頁。
- 19 同書、66頁。
- 20 同書、68頁。
- 21 同書、69頁。
- 22 同書、78頁。
- 23 同書、80頁。
- 24 同書、89-90頁。
- 25 同書、23頁。
- 26 同書、45頁。
- 27 同書、85頁。
- 28 水谷千秋 前掲書、24頁。君主の悪政に対し天が災異を下し、反省しないと革命が起こるという思想。
- 29 福田豊彦・服部幸造 全註訳『源平闘諍録』（上）講談社、1999年、27頁。
- 30 同書（下）、55頁。北極星や北斗七星を崇める妙見信仰は、日月・七曜・九曜・十曜など、日月星辰をかたどった紋所を用いるのが普通である。
- 31 同書、52-53頁。
- 32 東大寺二月堂修二会、別名お水取り。我々が生きていく上で犯した過ちを本尊とする十一面観音菩薩に発露懺悔すること。
- 33 日本大学大学院総合社会情報研究科紀要、2009年、10号『中世武士の生死観（5）』-『保元物語』、『平治物語』における「死にざま」の諸相-参照。
- 34 柳瀬喜代志 前掲書、19頁。
- 35 同書、24頁。
- 36 同書、26頁。
- 37 同書、29頁。
- 38 同書、23頁。
- 39 林睦朗 前掲書、79頁。
- 40 同書、28頁。
- 41 同書、31頁。
- 42 同書、34頁。
- 43 同書、45頁。
- 44 同書、88-89頁。
- 45 同書、90頁。
- 46 関幸彦『武士の誕生 坂東の兵どもの夢』日本放送出版協会、1999年、110頁。
- 47 林睦朗 前掲書、223頁。
- 48 柳瀬喜代志 前掲書、66頁。
- 49 小峯和明 校注『今昔物語集 四』岩波書店、1994年、489頁。

(Received: May 31, 2011)

(Issued in internet Edition: July 1, 2011)